

--[目次]----- 「2.28 緊急シンポジウム特集」-----

[1]緊急シンポジウム「市大の将来を考える」に寄せられた 60 人の文書発言録

[2]緊急シンポ「市大の将来を考える」会場における口頭発言録

[3]基調報告「今の市大の状況について」商学部昭和42年卒、教授松井道昭

[1] 2月8日「緊急シンポジウム - 市大の将来を考える」に寄せられた 60 人の文書発言
記録担当者からのお断り、原文は明らかな誤字のばあいを除き、そのまま収録しまし
た。

市民の発言

[市民1]市の税金で大学が運営されることは教育の機会均等の立場であたりまえのこと、赤字ウンヌンはおかしいと思う。市民に開かれた市大として改革してほしい。そのために、「市大を考える市民の会」に幅広い市民の参加がほしいと思う。

[市民2]横浜市大の特徴の一つとして「国際貢献」があると思う。(1)それをどう評価し、(2)位置付けるか？ をパネリストに聞きたい。(3)その前提として、市大がどれほど国際貢献しているデータがまとめられ、知らされているか？ (これは市大教員・職員の責任である)。

[市民3]大学は文化の程度を示す一つの指標だと思います。大学をなくすことで横浜の文化の程度を下げてほしくない。

[市民4]実行委員会のみなさん、ごろう様でした。がんばりましょう。

[市民5]緊急であったのに、これだけの人々が参加してくれるのは関心の高い課題だったからです。こうした場で改めて“内部改革”を訴える学生たちの声を大切にしたい。「あり方懇」に対してどういう対策を示すことができるか、今度は教員組合を中心にまとめる番です。財政難を理由に行政を縮小するだけの改革では、さらに財政を小さくするだけになります。今日、ここで明らかにされたように、市大の意義・役割を再確認し、必要な行政を行わせる運動を市民運動として発展させたいものです。

[市民6]市会議員です。市会の大学・教育常任委員会委員にも、今日の話合いのまとめたものを渡してください。これからも公立大学として存続できるように、情報を共有しながら頑張りましょう。

[市民7]学長の新聞の意見を読み、今後の働きかけ方では、このシンポジウムの方向を動かせる可能性があると思える。この運営委員が(少数で)個人的にジックリ話しあうことが必要と思う。こちら側への心配をなしさせるよう働きかけてほしい。

[市民8]様々な立場の人の意見が出て、大学のありかたへの理解が深まった。それだけいっそう市と「あり方懇」の不当さと浅はかさが浮きぼりになったと思う。三宅さんが最初に訴えたように、大学には高い理想も必要だし、やはり大学自治の理念もいまだに光を失っていないと思う。ここであらためて、全大学人と市民とで力をあわせて、なんでもかんでも「民で！」という視野のせまい社会・政治のあり方を正していきたい。(P S)パネラー

の学生やフロアの学生の発言は大変よかった。予想以上に大学の理念をよく語ってくれたし、「真理探求の場」という言葉を久しぶりに学生から聞いた。

在学生の発言

[在学生9]パネリストのお一人が「学生の多くが反対の声を挙げればこのような動きは阻止できる」と発言された時は、ハッとしました。やれる事、やるべき事はまだまだたくさんあるはず。具体策、解決策は明確にできていないのは事実。その一つとなりうるのが「崖っぷち」や「YCUフェスタ」かと思われるが、まだ規模と力が弱小で、改善の余地があると思います。今後は僕も協力しますよ、ちゃんと。

[在学生10]何故このシンポジウムに学生の参加が少なかったかという点については、テスト期間中という短期的な理由だけではないように思う。何故今までこれほどの問題の情報が公開されてこなかったのか。私は

個人的に自分の教授から教授会での問題を聞かされ、1年間、では何故学生に情報が公開され提示され、この問題が問われないのかと不満に思っていた。9.11教授の意見公開(正式な名前は忘れてしまった)についてもそうである。ただ公表したのみで、その後の反応を求める態度は見られなかった。大変高圧的な「意識がある者だけでよい」という切り捨てではないのか。今までの歴史の中で愛着を持っておられる上の世代の方々の存在はよく伝わった。では、何故その情熱と現在は断絶しているのか。

[在学生11]「学生が集まれば一発で解決する問題」...パネリストの三宅さんはそうおっしゃられていたが、僕たちも「大学を無くさないで!」という意識ではなく、「ツブせるものならツブしてみる!」ぐらいの意識でこの問題に取り組んだほうがいいのかと思った。学生として自分たちに足りないと感じるのは危機意識ではないかなあと考える。

[在学生12]正直に言って、自分の生活に密接に関係している問題なのにもかかわらず、どこか遠くの方で話し合いが進んでいることに不安を覚えます。今回のシンポジウムについて言えば、様々な見解を持った参加者の、様々な意見が挙げられていたと思います。これらを統合(少数意見を単純に排除することなく)し、市大としてのコンセンサス=足場の確立が必要かと思いました。(あれだけ意見が飛び交う場であれば、できるはず)。学部生・院生を含めて極めて情報不足な状態であることは否めません。これでは将来的に考えても、後手後手にまわらざるを得ず、かくいう自分も何かしなければならぬのは理解できるが、具体的に何をすべきか、何ができるかはわからない。

[在学生13]市大には特色がないと「アリカタコン」にはありますが、市大の学生として感じるのは、市大には鎌倉アカデミア的な教育・文化の場であるという特色があると感じます。講義の中でも、その他の学校生活の中でも、本当の意味で「考える」ということのできる場だと思います。この事を他の大学に行った友人などと話すと、「ウチの大学にはない」と羨ましがられることが多々あります。これこそ(考えるということ)が教育というものに必要なものだと思います。

[在学生14]市大に連なる一人一人が周囲の人にアピールしていくことが重要だと思います。

[在学生15]今回参加した数少ない在学生の一人として意見を述べます。「市大の将

来を考える」という議論に多くの市民の方々、OB・OGの方々が集まって下さいました。けれど、本来大学の場の主役である学生・教職員、特に学生が少ないことを非常に残念に思います。これが現実です。しかし、このままでは、学生としても終われません。学生が多く参加して、より活発な話し合いができる場を企画する場にもたち、より学生が積極的に参加できるよう、推し進めていきたいと思えます。

[在学生16]私は国際文化学部1年の学生です。今日はたまたま大学に来てこのシンポジウムを知りました。以前から「市大はなくなるかもしれない」ということは言われていて、学生の間でも話題になっていました。しかし、具体的な争点が見えず、なんとなく私には手の届かないもののように思っていました。また、お金が足りず、横浜市にも貢献していないのなら、しかたないのかもしれないと思っていました。しかし、今日途中から話を聞いていて、横浜市の言うことに矛盾があることを知ってショックでした。でも「医学部と看護以外はいらぬ」と言われ、しかも地方出身が[肩身が]せまいなと思っていたので、少し勇気が出ました。私は横浜市に住んで暮らしているから、横浜にお金を落としています。それに世に名を残す人間にはなれなくても良い人間や良い母親になりたち思っています。そう思って一人一人が大学に通っている。直さなければいけない所もあるかもしれない。でも、この大学をなくして欲しくはないと思えます。価値のある場所だと思うから。

卒業生の発言

[卒業生17]市大の将来像について一方的な市側のニュースが流されている。大学当局の考え方が市民に全くといっていいほど、知らされていない。県民、市民、学校側、卒業生、在校生一体となった取組みが大切であると思える。

[卒業生18]横浜市は人口350万を超え、もし日本が100人の村であったならば(小数点以下を四捨五入して)3人は“浜っ子”ということになります。その3人は当然責任を果たさねばなりません。市の本音は大学病院を売却したいようですが、日本一大きな市(都道府県と同格の政令都市!)がこんな事を言うとは本当に情けない。横浜市は福祉が遅れているというのを大学のせいにして、さらに福祉後退を押し進めるという中田市長のやり方に恐怖を感じます。市民の立場に立った無党派市長のはずでしたが、実際はとんでもないパフォーマンス市長のようですね。パネラーの方の「地域が世界に対する貢献は？」という言葉にハッとさせられました。ちょっと苦言です。時間は勿論大事だが、発言者に対して失礼だなとい場面も見受けられました。橋爪と同じ?(高圧的という意味で)

[卒業生19]“浜大の俊英我ら”入学時に何と傲慢な歌詞だろうと思いましたが、ある卒業生から“(一芸に)俊英(たる)我ら”という解釈をしてもらって、なるほど!!と思いました。そして改めて市大というのは、地道にこつこつと一つの道にとりくむ人々の集まりなのだなあと思うようになりました。欠点はどうも不器用なこと。市大の存立意義については今日の議論でも多く語られましたが、数えあげればきりがなく(商学部卒業生としてはこの大学の会計学研究を強くあげたいと思えます)、その中には地味なもの、目立たないものもいっぱいあるかもしれませんが、決して無視できるものではなく、アピールできるものはアピールして、この動きを実のあるものにできればと思います。乱筆失礼しました。

[卒業生20]大学での教育のあり方について、その良し悪しは別に考えることとしても、入学してくる学生の質は良く、今後の社会においても力を振るってくれる者が少なくはないと思います。大学を廃校する理由が設備投資による赤字ということだけであるのなら、その事業計画を立てた市に問題があるわけで、その責任を大学が負うことはつじつまの合わないことだと思います。海外では、十分な設備がなくとも、すぐれた研究成果をあげる大学が多いと思います。教員が市大卒で、内輪的ぬるま湯につかった、安穩とした状態に居るように思われる、教育の仕方をしらない、そう思える教員もいたかもしれない。後輩に、「市大の学生は入ってきたときは優秀なのに、出るときバカになってますよネ」と言った者がいた。教育の質が低下して、教育機関としての意味をなさないというのであれば、廃校も仕方ない。でも、学ぶ意志に前向きな学生には手をさしのべてくれる教員も多いと思うし、この大学に入学した学生一人一人の個性も素晴らしく良い刺激を与えあえる仲間が集う大学であると思います。人を育てる場としては(設備が多少悪くても良いのでは)十分機能している大学なのだから、廃校の理由が納得できません。私的なことではありますが、この大学で出会った仲間がいて、この横浜を好きになり、就職して他県に移りましたが、7年たった昨年末に、この横浜に帰りたくて戻ってきました。これからは横浜市に納税者になります。地方出身者の私がこの大学で学んだからこそ、市の納税者になるのです。そういう市民がいることも忘れないでほしいです。

* 教育は営利的なものではない 確かにそうです。でも、税金を使いすぎる理由にはなりません。* 教育における高い理想 理想は大切です。でも、絵空事では意味もなく、実現できる可能性と、そのための目的があるからこそ、意義があるのです。具体的に何が起きているのかを知るべきです。難しい話はわかりません。でも、これらの考えは公務員的思考ではありませんか？ 市の問題は何ですか？ 日産を立て直したゴーン氏は日産をなくすためではなく、日産を生かす経営をしました。生かすためには利益が必要です。利益を出すためにどうしたのでしょうか？ 理想をおったのでしょうか？ 必要以上の設備投資をしたのでしょうか？ 市の運営に大きな利益はいりません。お金の利益はいりません。人の心が豊かになる利益は必要ですが、これからどうしたのですか？

市大を残すために、これからどうするのですか？ 具体的に、それはだれがするのですか？ 実際に、大学側の考えは何ですか？ 大学はただの研究機関ではない。教育の機関だと言うのなら、教員自身も教育の仕方を知り、身に付けるべきでもある。そして市大が市の機関なら市税を無駄にしないための、予算の申請をするべきでもある。そのためのオブザーバーも必要かもしれない。そのための具体的案を提示するべきである。平井堅とか、市大卒芸能人に市大の良さを語ってもらうというマスコミ戦法も大事かも？

[卒業生21]* 市が大学を維持することのメリット(存在意義)(人材、研究、ブランドイメージetc.)、* 大学当局による態勢確立(学生側、教員側、職員側)、* 学費値上げ問題(逆行して学生の質を上げる、)(入学は容易に)、* 自治会の不在が大きなダメージなのか？、* 教授会、職員組合の声は如何に？ 経営財務問題と市当局への問題との議論の過程を確立。本日は年配者の感傷に偏った感がする(過去を語る場としての未来ならば不要)。将来を議論する建設的議論が希少。* 当事

者としての全学的議論(学生、教職員を含む)をたたき台としなければ、将来は見えない。*大学の主体者であるべき学生・教員の声が見えない。本来ならば、核にならなくてはならない存在であるのに…。因みに、大阪市立大学と大阪市との関係はどうなっているのでしょうか…。市当局には有効な比較対象となり得ると思うのですが。

[卒業生22]「あり方懇」座長は市の方針をそのまま述べているにすぎない。横浜市長・横浜市はその後ろに隠れて反響を見ている。アドバルーンであるが、これは私たちとしては見過ごすことなく、撃ち落とさねばならない。市長は2期目の当選をめざして目立つ実績づくりとして大学問題をターゲットにしている。市長の反対勢力を結集して、市長の施策をくつがえす努力をすべきである。市民、市議会に積極的に働きかける必要がある。

[卒業生23]新聞社の経済部で大手企業を日々取材しておりますが、どこも痛みを伴う改革を強いられております。大学も改革と無縁ではられないのでしょうか。今回のことが個性ある大学への飛躍につながればよいと思います。

[卒業生24]横浜には大学が一つしかない。たった一つの大学を赤字だから不要というのはどういうものか。大学は利益を生まない。しかし、多くの「知」の利益を生み出しているのではないですか。大学のない国際都市なんてありますか。国際都市を自認するなら、大学の一つや二つもつのが当たり前です。(留学生の卒業生)

[卒業生25](1) 税収入の不足など行財政改革の一つの柱として出されて来た経費節減対策として大学の存廃が論じられていることに対し、憤りを感じる。(2) 大学は文化であり、都市の品格である。(3) 75年で累積赤字1,141億円は大した額ではない。まして資産(ストック)があるわけだから。

[卒業生26]横浜市が財政難であることは知っておりますが、経済的な理由により進学機会が閉ざされることはできるだけ回避したいのです。これからも時間のゆるす限り、参加させていただきたく思います。

[卒業生27]横浜市大の存続の危機だと聞いてかけつけました。私は1965年、この大学に入学しました。学生運動の盛んなところで、「大学とは何か」「教育とは何か」をその運動を通して分かってきました。今、埼玉で教員をしています。その時に学んだことが今、生きています。卒業生は全国で活躍しています。

[卒業生28]「市大の廃校ないし縮小」というショッキングな議論が進行している事を03年の年賀状で知るところとなり、このシンポジウムに参加する事となりました。財政的に横浜市の負担がかくも重きに至ったのはいったい何が原因だったのか、その原因と大学そのものの存在意義という論点の異なる問題が混在しているように思います。市大という歴史もあり、各界に優秀な卒業生を輩出している大学が、市の財政という理由だけで廃校となるにはどうも納得がいきません。市というパトロンが今、パトロンを降りたいと言っている事なのだろうと思いますが、横浜という文化、国際性そのものを醸成していく上で、なぜもっと市大を市は活用しないのかが残念です。経済原理は非常に大切ですが、横浜に住む、横浜にあこがれるというのは、そこに文化があるからであり、横浜市がそういう文化的パトロネージュを放棄しようとしているとするならば、大変残念な事と思います。

ハコ物にこれまで多くの税金をツギ込んだ事のツケを、なぜ大学教授陣、学生、OBが負わねばならないのか、もっとここに至った原因の分析が必要と思いました。

[卒業生29]良い意見、正しい見方が沢山出されました。大学の先生方にとって、大きな財産になったことと思います。松井先生[報告者]のまとめの方向で、世論を拡げ、横浜市大の存続、発展を目指しましょう。

[卒業生30]医学部の動向が気になります。他学部と遊離しているか否か、今回の問題を自分たちの問題として自覚しているか。まず倶進会(医学部の同門会)の中で、論議を起こしていく事から始めるべきだろうか。

[卒業生31]* 大学とはどうあるべきか...! 文科省の求める大学では、将来の日本や子ども達の為に有意義なものにはならない。* 市大の存在意義は国立とは違う。市独自の大学として存在するところにあると思うので、文科省に組みせず、大学活動(運営・経営と研究・教育 - 前者と後者は切り離すべき -)を進めていくべきだと思う。* 現在、国立大が独法化により特徴がなくなり、存在があやぶまれていく今、市大はこの機に大いに特徴を出して宣伝していったら良いと思う。* 神奈川新聞社に今日の話し合いを載せるように行動していくことも、今、必要かと思う...

[卒業生32]市大にとっては、厳しい試練かもしれないが、シンポジウムでも出たように、広く市民にも議論を公開し、存続することを前提として、これをチャンスととらえ発展的に議論を深めていくことが重要と考える。

[卒業生33]「あり方懇」の私案は大学の歴史と役割を無視したものである。赤字を理由に大学、病院を廃校・売却することや大学の内容改革私案は研究を実利のみに走らせる大学の名に値しない大学に変質させるものである。「あり方懇」の私案に抗議し、撤回を要求する。

[卒業生34]今回のシンポジウムは多数の人々が集まり、様々な意見が出たので、「市大の将来」への意識のさらなる高まりがなされたと思う。正確な事実を知る事、それをうまく伝えていくことが今後の重要な課題と感じた。その上で、世論を呼ぶに足る団結を成し遂げることが「市大の将来」を左右していくであろう。身近な友人達を語る所から、小さな活動から輪を広げていければと考えている。

[卒業生35]“みなとみらい”の失政のスケープゴートの為に、OBでもない、売名行為としか思えない座長の「あり方懇」には徹底的に反対です。1998年に香港で矢吹先生に「浜大香港会」に出席戴きました。

[卒業生36]* 大学教官の皆さんに。 - 夜間の社会人大学院講座を横浜駅近く(進交会館など)で開講するなど新しい試みを積極的に。* 学生に。 - 地元の小・中学校にボランティアなどで、子ども生徒のために(特に教職志望学生は)出ていくべき。(都下の多摩地区では進んでいる。)* 会の進め方 - 運営委員(常任運営委員)等を選び、組織的、機能的運動を。

[卒業生37]「市民の大学」として存続させるにふさわしい大学として、大学のあり方、存在意義から経営・運営方法まで、在学生・卒業生・教員を含めた市民で知恵を絞りあう場を持つべきだと思います。また、市に対して存続を要求するだけでなく、一人

一人が金銭その他の負担を直接してまで残したいといえるのかということも考えるべきだと思います。学内での政治的活動を禁止しているときいて、びっくりしました。大学側の意思決定に対して学生が意見を表明することを封じるなんてとんでもないと思います。市大も変わりましたね。

[卒業生38]私は小学校、中学校、高校と横浜市内で過ごして参りましたが、横浜市立大学は多くの横浜市の子どものあこがれでした。子ども達に夢や希望、そして勉強する意欲を持たせること自体が横浜市立大学の存在意義ではないでしょうか？ 先の見えない今の世の中でそういった子ども達の夢を奪ってしまうのは非常に残酷で、結果的に市民、横浜市の将来に重大な損害を与えるのではないのでしょうか？

[卒業生39]一部の人間によってこのような決定がなされているのが疑問である。この私的機関にいったい何人の市大OBがいるのであろうか...？ 新聞に報道されている記事の書き方は、市民に市大をマイナスのイメージで見られるようにしむけられたもののように思う。今回はまず、「私案」に対する質問や提言をすることが大事であり、次回、次々回と重ねていく過程で市民からの意見を取り入れ、具体的な改革案を作っていけたらと思います。

[卒業生40]ありがた懇談会が「廃校も選択肢」を前提にして、結論を先にして議論をしているのはおかしい。廃校はもってのほか。もっと一般市民が参加して話し合ってほしい。赤字の額は村瀬パネリストが指摘しているように、資産の価値を考えていないように思われる。ただし、市民の市大に対する支持、理解は必要。このため、さらに市民に分かり易い形での貢献があってもよい。いろいろ考えたらどうか、理想に加えて、皆で。

[市民への貢献案]横浜市大の構内を市民に開放する。自由に出入りしてもらい、親しんでいただく。これは都立大学が実施している。私事になるが、私は「食べられる野草と料理法」を勉強しているので、大学の講座などを通じて市民に伝え、貢献したい。

[卒業生41]中田市長はクビ、橋爪座長もクビに、運動すべきだ。

[卒業生42]今回の危機が逆にチャンスになりそうですね。市大が自分たちのものとして考えていく人が多くなっていけば、今回の危機を超えていけるとと思います。お疲れ様でした。

[卒業生43]「これといった特徴がない」「生彩を欠いている」などと言われていることについて。私は小学校教員をしています。今、「学校の特色」を出すようにということが厳しく言われていることと同じだなと感じました。しかし、必ずしも“有名人”を出すことが「教育」ではありません。人として当然の良識と知識と活力を備えて生きていくことが、社会への貢献だと思います。小学校から大学まで、今、「教育とは何か」が問われているのですね。大変な問題だと思います。

[卒業生44]神奈川新聞報道には当初びっくりしましたが、よくよく資料を見ると、以下のことが判ります。

市税収入	7,000億円(概算、以下同様)
市民	350万人
市民1人当り	20万円

一般会計から市大への繰入れ	240億円
市税に占める割合	3%強

神奈川新聞の報道は借入金(負債)と赤字を意識的に混同させていると思われる。市税の3%強は市の予算全体からすればもっと低くなります。たぶん1%以下になるのではないのでしょうか。大学に対してその程度の支出をするのは大都市としての責任であると思います。

[卒業生45](1)この会の意見を市長と「あり方懇」へ強く訴えるべし。(2)大学(学長)が方向性をはっきり決めて、(どう云う特色を出して、どう市民に貢献するか)。「あり方懇」と市長に訴える。(3)オービー会も会長を中心に市長と「あり方懇」に訴える。(4)金沢区等市大のある、又は関係のある市会議員を動かす。(5)市役所のOBも行動を起こしてもらおう。

[卒業生46]累積赤字1,141億円を理由に「廃校も選択肢の一つとすべきだ」との事で横浜市大の存続を検討してる「あり方懇」と対決するために、次の提案をしたい。(1)75周年の歴史を誇る我が横浜市大の卒業生に緊急通信(葉書しかないだろうが)でこの事態を教えるべきだ。(2)OB会の進交会が今こそ、この緊急事態に立ち上がるべきだ。75周年の記念事業で2億円近いお金を集めて集会所を作るらしいのですが、こっちの方が先きだと思います。

[卒業生47]市大の卒業生の一人として今回の市大存廃問題は非常事態と考える。したがって、緊急事態対策として学生、教授、OBが一致団結して事に当たらなければ効果が出ない。対策(質問ではなく意見です)。1. 反対運動の署名10万人運動を即実行しよう。2. 大学と神奈川県下の経営者との産学合同(技術のみでない)横浜市大の特長を出して取り組まねばならない。少し、大学側としてはのんびりしていたのではないか(進んでいる大学は慶応大、早大、東大等)。外から見て、横浜市大は存在感がない。3. 横浜市大の特長は何か? - 大学の方向性を学生、教師、OBと一体となって至急に作るべきだ。特に大学側にその意志があるのか? 4. 横浜の公開講座(医療・文化・健康・教養)をもっと現在の時局に合わせて場所は横浜の中心地(横浜駅周辺、みなとみらい地区)で積極的に行うべきだ。5. 横浜市大の経営を産業界と市民で今こそ考えるべきだ。一口1万円でも経営参加できる本当の意味の市民大学をめざすべきだ。

[卒業生48]市大卒業生として、市大を愛する心は誰にも負けないつもりです。とにかくこの大学を存続させなければなりません。市長に皆でうったえること、行動にうつすことが第一です。

[卒業生49]横浜には他にも大学があるので、市大は必要ないということですが、市大に代えられる大学がどれだけあるのでしょうか。市大は公立大学故に、全国から優秀な人材が集まってきます。私立大学でこれだけの優秀な学生を集めるのは一部の大学に限られます。横浜にある他の大学にはとても無理ではないのでしょうか。横浜市大には75年にわたる頭脳と知識、そして最近建ったばかりの巨額投資した設備があります。これをすべてゼロにすることが横浜市にとって何のプラスになるのでしょうか。これを生かす

方向で考えるべきだと思います。「横浜市大には特徴がない」といいますが、横浜国大に比べたら、ずっとずっと特徴のある大学だと思います。医学部も商学部も横浜の歴史そのものだし、国際文化学部も上海との交流を考えると重要と思われます。

[卒業生50]早く、具体的に「あり方懇」や市長に対して訴えないと、大変だ。市民に対して「あり方懇」の“実態”を伝えなければならない。

教員・元教員の部

[教員・元教員51]市大の教員として参考になる意見があり、非常にためになった。実験系の教員ですので、日頃研究の忙しさにかまけ、なかなかこのようなことを考える時間を取れないのですが、市大の現状、雰囲気はひしひしと身近かに感じ、身につまされる思いをしております。このようなシンポジウムに参加して、大学教員以外の方の御意見(研究・教育・地域貢献など)を聞いて、本当の市民ニーズ・意見とは何なんだろうかと改めて考える必要があると思いました。また、研究の重要性、意義をもっとアピールする必要を感じました。

[教員・元教員52]60年代の反合理化闘争の経験を反映することが必要だと思います。

[教員・元教員53]今回の会合を中核として力を結集し、市長の方針を変更させるよう期待します。

[教員・元教員54]かつての身内として進言したい。(1)学生への働きかけが必要ではないか。かつての自治会ではなく、学生 = 市民の視点で。(2)教員の学部を越した全学教員会議を行ったらどうか。

[教員・元教員55]ご苦労さまでした。すでに提案がなされましたが、今日のOB、市民の声をぜひ「あり方懇」にまず伝えていただきたく思います。

[教員・元教員56]神奈川新聞の記事を真に受けてふり回されている人が大部分らしいことが分った。事務局の“たれ流し”情報に対抗するために「市大の将来を考える市民の会」のホームページを作ったらどうか。このままでは、そうとうひどい形の大学になっても、「廃校にならなくてよかった」ということになりかねない。廃校に対する危機意識を力に運動を組織したらよい。

職員の部

[職員57]OB・OGが多数いるので、会場の方も発言したように、市内各区で市民にアピール出来るシンポジウムを開催してほしい。医学部をもつ大学なので、歴史的背景もあり、設立された経過も含めて公立の意義があり、必要であり、市民も理解していると思う。ただし、経営努力が必要であると思う。三宅パネリストが発言したように、学生やOB・OG、議員を通じてアピールが必要。

[職員58]良い意見が多かったが、市民の参加が少なく、発言もなかったのは残念、今後の工夫が必要。

[職員59]市大センター病院のナースです。組合の役員もしている関係で、このシンポに参加しました。市大の存続の意義は参加の皆さんからも意見がだされていましたが、これからも含め“貢献できるような人材を育てられる教育システム”を維持できる事が重

要なのではないでしょうか。病院の中のことで、ドクターにも市大卒の方が多くいますが、市大病院を良い意味で存続させるという視点からいうと、医局まかせの人事で本市管理部の責任のなさも含め、ほど遠いものにならざるを得ない状況と思っています。ぜひこの機会に改善されたいと思います。“赤字”の出し方にはギモン！！です。

[職員60]医学部附属病院の事務職員で、病院の労働組合の役員をしています。独立行政法人、特に国立大学の独立行政法人化の動きが明らかになって以来、医学部・附属病院をもつ公立大学の労働組合と情報交換をして来ています。今回の「市立大学のあり方懇」に対しては、この独立行政法人化の流れに沿ったものとして、その動向に注目して来ました。しかし、「座長私案」として文書化された中には、独立行政法人化以外に、「市立大学のこれまでの歴史と現状」を否定する考え方が盛り込まれていました。これを契機とし、「大学とは何か？」「市立大学のあり方は？」という議論も生まれて来ており、それも含めて今日のシンポジウムも開かれたのだと思います。私は私立大学の経済学部だったのですが、「文科系の学生の授業料は医学部、工学部に使われる」とよく言われていました。そこでの4年間は専門は身につけませんでした。世界、日本の歴史と現状等について考える事に目覚めました。それはそれでとても重要な事だと思います。大学をはじめ教育に国が責任を持つ事は当然として、教育機関としては国立、公立、私立など多様な形でよいと思います。大学は世界、人類に貢献する研究、そして教育(医学部も含む)が使命であり、市立大学としては、「市民が誇れる」大学としての研究をしていく事でよいと思います。最後に、医学部、2つの附属病院には診療報酬の引き下げの影響もあり、市の負担が一定程度必要なのは是非、ご理解していただきたいと思っています。(以上)

[2]緊急シンポジウム「市大の将来を考える」(参加者約160名) 発言録

本発言録は主催者側の速記によりまとめたものであり、脱漏、不正確な箇所、誤解は免れないと思っている。その折はご寛恕願いたい。文責は挙げて主催者にある。

パネリスト三宅陸郎氏 昭和32年卒 数学専攻

本日のシンポジウムには、正直行って出たくなかった。出れば、どちらから[註、大学側と市長筋の双方から]も責められるからだ。私が入学した頃は森泰吉郎学部長だった。当時は市財政赤字問題があり、市大がピンチに陥っていた。友人の父親に自民党の団長がいた。この人が議員を説得したおかげで、市大は廃校を免れた。二度あることは三度あるというが、現在がまさしくそうだ。私らはそのときも、大学は変わらねばならないと訴えた。森さんだけは聴き入れてくれた。私の同期に横江と草薙[横江靖朗氏と草薙昭雄氏、ともに市大生物科の教員で若くして死去]がいるが、彼らといっしょにこの大学の行方を心配したことを記憶している。

高秀市政はハコモノづくりに熱心だったが、大学を甘やかしたともいえる。とにかく大学に対して好意をもっていた。このたび市長を擁立し、9つの区で勝利した。現市長はパフォーマンスを得意とするが、現在は桜木町問題で対決している。大学は存続すべきと思うが、赤字という判定を受けた以上、財政状態に堪えられるようにしなければなら

ないし、大学を改革しなければならないのは当然だろう。内部の先生方のコンセンサスをとりつつ、崇高な理想を求めての努力しなければならない。

パネリスト阿部貞夫氏 昭和37年卒 法律専攻

いま、公立大学としての市大の役割が問われている。何事も財政が根本であることはいままでもない。付属病院、センター病院の財政的負担が大きく、研究と臨床の競合関係が大きく影響している。だが、病気を直すことと大学は別個の取り扱いを受けるべきものと思う。大学について国立、公立、私立の役割は微妙に違う。国公立大学は能力をもつ者を教育するという使命をもつが、これは放棄してはならない。[橋爪私案では]学生募集において横浜市の子弟のみを入学させるとなっている。私はこれには賛成しかねる。もしそうなれば、当世の学生評「高学歴低学力」に拍車をかけることになりかねないからだ。

国際化が進むなかで、大学は3分の1から2分の1ぐらいは外国人留学生を受け入れるべきであろう。公立大学もとうぜん社会貢献を考えねばならない。病院、患者数は定数で決められている。横浜市がいつまでも東京の衛星都市にとどまるのではだめで、横浜の特徴をもつべきである。市大は市のアカデミアの中心として国際的大学をめざすべきである。大学の先生方も市民講座を開き、サテライトスクールをもち、社会市民教育に力を入れるべきであろう。[橋爪私案では]教育重視型の大学が提唱されている。しかし、研究を離れては、過去の知識の切り売りになってしまう。大学というかぎり、研究はつねに必要である。教育のみとなれば、結局、低レベルの教育に惰してしまう危険性がある。

パネリスト竹田弘明氏 昭和37年卒 英文専攻

結論から先にいいたい。皆さんは市大、市大というが、私は浜大、浜大であってほしい。そう主張するわけを言おう。私は、いま話題になっている蓮池薫さんの母校柏崎高校の出身で、昭和33年に一浪して市大に入学できた。順当に4年間で卒業できた。当時の学長は三枝博音先生であった。当時から、横浜にとって医学部は必要だが、他は不要という議論があった。そのころ、入学金3万円、授業料1万5千円であった。因みに、国立大学は1万2千円であった。私は4年間で9万円払った勘定になるが、それは少額である。当時の為替レート1ドル=360円で計算して250ドルになる。4年間を通しての学費の総計がこれだ。このことを駐留軍の兵士に言ったら、「信じられない！」という感想が返ってきた。卒業とともに「東急観光」に就職したが、以後は横浜に在住し、税金を41年間まじめに払いつづけている(笑い)。

市大は残してほしい、そのためには覚悟が必要だ。市大は譲ってもいいが、浜大は残してほしいし、今までの伝統も残していただきたい。75年の伝統は守るべきである。ノーベル賞の白川さん、田中さんクラスの人材を輩出していただきたい。市大は地域貢献は忘れて、地球貢献を考えてほしい。本学には、環境ホルモンで名を馳せた逸材を出した実績があるではないか。最近では歌手の平井堅がいる。こうした名誉はきわめて大事なことだ。口も出さな、人も出さな、リストラの余り[...書き取れず]。国公立は独立法人になるそうだが、それでもいいし、株式会社でもいいだろう。その際には、是非とも

阿部貞夫さんを学長に推したい。

パネリスト村瀬弘明氏 昭和40年卒 国文専攻

昨年春まで私立高校の教師をつとめてきた。その体験から危機に対する見方を述べたい。私は日本国憲法と教育基本法を信条として教育をやってきた。日本は大戦を経てまことに酷いことになった。そこで、教育基本法を柱に据えた。市大の教育もこれを指針にしてきたはずだ。市長の中田さんは「横浜市大の教育に特徴がない」という。「市内に14大学があり、それでじゅうぶんだ！」ともいう。彼がいう特徴とは何なのか？ - 横浜港のことだろうか？！

文科の同窓生には教員が多かった。いっぽう、商学部卒には市役所の勤務者が多かったように思う。私は国家のため、世界平和のためにやってきた。巷の評判では、「市大卒は地味だが、教養程度は高い」となっている。これは立派な特徴だと思う。これぞ市大の存立意義につながることといえまいか。眼を世界に向けると、アメリカ、ロシアなどの授業料はたいてい無料である。授業料を只にしても損にはならない、必ず国家や社会への見返りがあることを意識しての措置だ。市大のばあい、授業料をとっているだけでも収入増につながっていると考えるべきだろう。このばあい、卒業生が果たして国や市に返してくれるかどうかについて真剣に考えねばならないこともまた真実である。1100億の赤字の見方についてふれたい。中田市長の方針に従えば、廃校にするか、採算ペースへの改編にするかのどちらかとなるだろう。今年で23年目を迎える「みなとみらい計画」は当初、2000年までの20年計画で経費2兆円のはずだった。それが不足し、途中で3,200億円ほど追加された。遅れに遅れたこの事業計画は2005年には完了するはずである。それでもなお1100億円ほど不足するとの見込みから、市は追加予算を出すことになった。しかし、不景気が深刻化したいま、企業がビルをつくっても会社は入らない。それでも1100億円を注ぎ込むのだ。いっぽう、市大には金を出さない、逆に市は市大病院を売ること考えている。日本政府はかつて長期信用銀行を3兆円で売った。中田市長もそんなことを考えているのだろうか。赤字の原因についてだが、「あり方懇」資料では]施設のために注ぎ込んだ費用を赤字として扱っている。その赤字はちゃんと資産の形で残っているというのに、赤字だという。市は鶴見の研究施設へ400億円支出した。これも立派な資産である。私立大学では、施設を建てるのに財源は寄付や貯蓄で賄う。だから、財政的な心配は要らない。とにかく、市大は残さねばならない。

パネリスト遠藤紀明氏 昭和56年卒 独文専攻

私は市大の卒業生、非常勤講師、非常勤講師組合の代表という3つの顔をもって。そこで、3つの立場から述べたい。まず、卒業生としての立場から。私は累積赤字という考え方自体が納得できない。これについては他のパネリストがふれたので、ここでは省略したい。公認会計士ともあろう方がこの程度の分析しかできないのは驚きである。建物・施設は資産である。これを一般会計に繰り入れ赤字を計上し、それを根拠として廃校とするのは当たらない。

大学の地域貢献というが、地域が世界に貢献するという視点があってもいいのではな

いか。市民の世界貢献を助成する、それに大学がかかわるという視点がそうだ。「貧すれば鈍する」というが、まさにそれだ。市民は果たして大学を無駄だと考えているのだろうか。儲けるという意味での大学の貢献は難しいだろう。

次に、労働組合の委員長として言いたい。賃金の安いことは以前より問題になっていた。ところが、昨年三月末、とつじょとして大学当局は、それまでの年額制から時給制への改定を通告してきた。言いぶんは「勤務実績に応じた支払い」ということだった。じっさい、給料を受け取る立場からいえば、10～15%の減収になった。これによって大学費をどれだけ節約できたのかといえば、瀬戸キャンパスで2千万円程度にしかない。福浦キャンパスについては事情を知らない。これは市大全体の赤字からみれば、小さな数字である。経費削減の目的もあろうが、おそらくは事務局の本庁へのポーズだろうと思う。設置者が大学を管理しなければならないという発想から出てきたものであろう。

給料削減はまさに労働問題であるが、これでは大学における教育・研究の質を維持ができない。1年契約制の非常勤講師はただでさえ、身分が不安定で辛いものがある。今後、そのうえに「独法化」となると、身分保証はさらに不安定になることが予想される。

最後に、教員としての立場から述べたい。大学教育は営利事業ではない。地方公共団体や国は教育にたいして責任をもっていないのではないか。「教育は百年の大計」である。ことと次第では500年の先まで影響していくものである。教育を営利事業にしてしまうと、地方公共団体の品格にかかわる問題といえまいか。横浜市は大都市にふさわしい見識をもつべきである。

パネリスト山田勇介氏 商学部経済学科4年生

学生の立場からこの問題に迫りたい。テスト中ということもあろうが、この席に学生の姿が少ない、若い人も少ないのは残念である。だが、学生に意識がまったく欠けているわけではない。設置者側で「懇談会」がもたれた。しかし、学生は何も知らないし、知らされていない。わずかに関心を持つ者だけがインターネットのHPで問題の上辺をなぞるだけだ。とにかく積極的公開がなかったことを問題にしたい。学生も大学の一員であり、これに参加の形がないのはおかしい。そこで、私たちは去る12月11日、「学生による、もうひとつのあり方懇談会」をもった。その場で、いま何が起きているのか、その背景に何かあるかを問うた。ほとんどの人が何も知らなかった。ついで話題はどのような大学にしていくかに移った。事務局だけで一方的に学費値上げを決定したり、奨学金削減をしたりするのは「ひどい！」の一言だ。「やるよ」という通知だけでは、学生への配慮がまったく欠落しているといわざるをえない。「もうひとつのあり方懇」では、堅苦しく考えることなく率直な意見の交換を行った。そこで出てきた意見のいくつかを紹介したい。

1. 資格取得のため、専門教育のための大学でよい。
2. 市大生だから市に貢献するのは当たりまえ。
3. 教育に金がかかるのはしかたがない。
4. 学生は横浜市に貢献すべきだ。
5. 国文は45名だが、この小人数のメリットは市大だからこそできたことだ。
6. 市民貢献の一環として学園祭を公開しよう。アーバンカレッジで学生も市民と一緒に学ぼう。

今まで社会問題について意見交換する機会に恵まれなかったため、他の学生が何を

考えているのかわからなかったが、今回の本音討論により各人が意見をもっていることを知ることができた。それが、「もうひとつのあり方懇」開催から得た最大の収穫であったように思う。私たちは世の風潮に従い、「資格をとろう、専門を学ぼう」漠然とした意識のもとに学んできたが、教育・大学とは本来どうあるべきか？などの論議をしたことはない。そういう意味で、自分が大学4年間で何をしたいかを考えるためのよい機会となった。私個人についていえば、好きな授業は国文、環境問題、福祉、平和に関するものであった。専門という枠にはまっていない点が有意義だったように思う。市大はいろいろな授業をとれるところに良さがあり、深みと厚みがついたように思う。よい授業とは「考えさせられる授業」である。こうした印象がもっとも強烈である。わが大学には三枝博音学長当時の「鎌倉アカデミア」の精神が息づいているように思う。高校時代、私がイメージしていた大学はこういうものであった。これからも「鎌倉アカデミア」の精神は受け継がれるべきである。大学の危機を前にして、今後も「もうひとつのあり方懇」をつづけていきたい。

[10分間休憩]

(司会) 討議に先立ち、本日のシンポジウムに参加を希望しておられたが、事情で欠席された東大教授柳沢悠氏のメッセージを紹介したい。同氏は元市大教員である。

「橋爪私案では市大が『生彩を欠いている、国際水準にほど遠い』とあるが、それは間違いである。生彩がないところが多くの人が生彩ある業績を残しておられ、またその研究レベルはじゅうぶん国際水準に達している。」

(学生) 学生主催の「もうひとつのあり方懇」に参加した。予想外に多くの人が集まった。「市大はだれのものか？」という問題提起に、みんなのものと思っていることがわかった。私たちにはこれまで、私的感想を持ち込む場が少なかった。こういう機会をつくっていききたい。2月13日にYCUヘスターをもつ予定である。

(市会議員) 私は共産党の市会議員で、現在、大学を担当している。パネリストの発言にあったように、懇談会に市の直接関係者を入れないで論議をするのはおかしいと思う。市の税金を使って赤字ということだが、それ自体がおかしいことだ。「あり方懇」は市大に限らず、各分野でつづられている。港湾病院、市営交通、福祉施設など第三者のみから成る「あり方懇」がつづられ、それぞれ民営化が狙われている。

(元大学教員) 私は横浜国大学芸学部昭和35年卒で、そのご長く母校で教鞭をとっていた者である。国大には市大教員に多数来ていただき、交流をしたことがある。現在は日本科学者会議の大学問題委員をしている。その関係で今回の市大の問題を知った。「橋本私案」についての批判的見解をまとめ、資料としてこの場に持参したので、それを参照していただきたい。ユネスコは1998年、これからの時代の高等教育に関する世界宣言を出したが、これも資料に含まれる。「あり方懇」は市長の諮問機関だそうだが、そのこと自体が教育基本法第10条に抵触する。およそ大学のプランと称するものすべてが大学の自治に委ねるとというのが法律の精神だ。「あり方懇」は、大学が赤字をかかえている、だから存在意義がないというのはおかしい。赤字の大半は施設・建設費から発している。これは資産であり、今後も市の財産として残る。たとえ、大学が赤字だとしても、それゆえに廃校にすべきだの議論は乱暴すぎる。お金勘定だけで教育・

研究をとらえているといわれても仕方ないだろう。

(市民)私も日本科学者会議の一員だが、市大の存在意義についてふれたい。21世紀の産業宣言、国際的基準として指している。21世紀は南北問題、難民問題、社会的知識水準を上げていくことがたいせつである。高等教育を普及していくことが求められている。生涯教育の理念のもとに、多くの市民がだれでも望むときに高等教育を受けられるような条件を整備していく、このことがたいせつである。高等教育に関していえば経済的効率のみを考えてはならない。国立、市立、私立の別を問わず、できるだけ多くの人が高等教育を受けられるようはかるべきである。もうひとつは、過去の戦争体験のなかから、私たちは教育は公権力から自由でなくてはならないとの教訓を学んだはずだ。だから、大学の自治が基本にならなければならない。1960年、1970年安保のとき二度ほど大学管理法案が成立しそうになったことがある。当時、大学人を中心に反対運動が起こり、阻止した歴史を強調しておきたい。

(OG)私は12年前に卒業したが、いま考えていることを紹介したい。大学は残ってほしい。私は最近、ショックなことに遭った。司法試験の予備校では、私立大学の問題をつくっていると知って驚いた。まさしく今こそ、大学の存在意義を考え直す必要があるだろう。市大の意味を考えると、市民の大学という意味を忘れてはならない。地域貢献が外せなくなったとき、市大の良さを考えるべきである。それでも市長が「要らない」といったとき、金を出しあっても市大を存続させたい。

(OB)2つの意見を述べたい。ここに『市大創基百年史』の本をもってきている。[橋爪私案では]市大卒は役に立たないそうだが、ここに立派な反証がある。市大卒が社会の役に立っている証拠 - 各界で活躍する卒業生の名前 - がたくさん載っている。

もう一件述べたい。卒業後は貿易関係の仕事をずっとやり、先ごろ市大にもどって矢吹ゼミで学んでいる。私たちが出した「緊急アピール」で述べたことを再論したい。矢吹先生は冷遇されている。ポケットマネーでコンピュータや、中国語を含む特殊なソフトを購入され、学生の利用に供されている。来年に定年を迎えられるのだが、補充はされないという。「市大の宝」ともいうべきこの人の後任を採らないというのはまことに残念だ。日本と中国、横浜と上海を繋ぐ人材が今ほど求められているときはない、それはいま決定的に不足している。それゆえ、何としても本学での中国研究を存続させていただきたい。

(OB)市大で文科と商学部の両方で6年間お世話になった者だ。母校を愛する気持ちは人一倍もっているつもりだ。卒業後、横浜市役所に入ったが、市役所にも東大卒をはじめ、いろいろな人がいた。しかし、仕事に関するかぎり負けたという思いをしたことがない。労働組合の仕事でも負けたとは思わない。橋爪氏のいうことはまったく当たらないことを強調しておきたい。私からの母校への希望をいえば、外からは市大がよく見えない。市役所にて、とくにそれが気になる。市大はもっと外に出て、市民の眼に見えるようにする必要がある。

(学生)教授を前にしていいづらいことだが、おもしろい授業、おもしろくない授業があるのは事実だ。私は大学選びで、世間体と偏差値を気にして選んだのは事実だ。高校

時代は目的をあいまいにしたまま大学に入学した。本日の出席者で在学生在が少ない。もし大事なことであれば参加すると思う。自分が大学に居る間は大丈夫という発想があるから来ないのだ。たとえば、学費が値上がりすれば、めぐりめぐって自分に返ってくる問題なのに。

(OB) 私は84年卒で、国際貿易の商社に勤務し、長く中国貿易にもかかわってきた。矢吹先生の中国研究が打ち切りとなるのを知って非常にびっくりした。市大について財政問題が取り上げられているが、その取り上げかたが不明確で、セーブも見えてこない。「あり方懇」資料を見ても、なぜこんなに金がかかるのかわからない。廃校は納得できない。私は市大生としてはノンポリで、心ならずも入ってしまった。ノンポリは多いが、それだけに4年間いろいろ学べる機会に恵まれた。私の妻も市大出身で、それだけに市大への思い入れは深いと自負している。市大がどういうことをやっているかをもっと議論の場で深める必要がある。財政問題を明確にするのは重要だ。しかし、その問題と市大そのものの論議とは違うことを訴える必要がある。

(OG) 昭和44年卒の者だ。私はハマ生れ、小・中・高もハマで、大学もハマである。大学を受ける前に民間会社に勤務し、その後一浪して市大に入った。親からは「国公立しかだめ」といわれていたので、横国大と市大を受験した。国大の学芸学部もうかったが、巷の意見で「市大のほうがよい」ということで市大を選んだ。今年、国際文化学部の後期日程受験倍率が2.8倍だそうだが、「相変わらずだな」という印象を覚えた。卒業後は埼玉県の小学校に勤務した。夫も中文専攻の市大卒である。司書課程が取れるということで中文に入り、4年間のあいだに袖をすり合わせるようになった。こういう人たちがたくさんいるのではないだろうか。教員、大学教員になった人を多数知っている。現在、中国で教鞭をとっている人もいる。中文に学んだことが自己形成のうえで重要だったと思う。一時、文革を機に中国に背を向けたことがある。しかし、職場で帰国子女、残留孤児を迎えたことがきっかけで、中国への関心が戻ってきた。そこで中国語をやりはじめた。短期留学もしたことがある。向こうでは日本語を勉強する中国人が多数いる。驚いたことは、中国では留学生を多数受け入れて儲けていることだ。人間を育てていくことは難しい、それだけにたいせつである。市大を存続させてほしい。営利と無関係に大学を育てること、それは行政当局の責任ではないだろうか。本日の会合には受付名簿がなかった。市大存続のためのこうした運動を大きくするため、横のつながりをもてるよう、是非とも主催者のほうで検討していただきたい。

(遠藤紀明氏) 追加意見を述べたい。昔の市大は学費が安かったから学べた。橋爪氏は学費値上げを提唱しているが、逆にいっそのこと学費を半額にしたらどうか。

(阿部貞夫氏) 学費と授業料の関係についてだが、入口の敷居は低くしてもらいたい。入口を広く、敷居を低くすることは、教育への機会均等を確保するために必要なことである。ファンドつまり奨学金の充実をはかる。この組み合わせをセットで考えたほうがよい。さきほどから中国研究が話題になっているが、1984年から私が勤務する資生堂は中国と関係している。いま、世界の経済は中国を抜きにしては始まらないほどに、中国の存在感は大きい。中国では、経済の枠組は政治の枠組で決まる面がある。だから、こ

うしたものに関する研究を大学から抜いてはならない。アウトソーシングについてひとつの提言をしたい。研究設備は国に任せたらどうか。そこに学生も教員も乗り込むというかたちはどうか。全部を地場でもつことはないと思うが。

(三宅陸郎氏) 皆さんの話を聞いていて、いずれも戦略がないように思う。3月には答申が出るのだ。「ああするとよい、こうするとよい」といくらいっても、具体的にそれを適える市会議員がどれくらいいるのだろうか？ いまの議員はそういうことをまじめに考えてはいない。立ったり座ったりだけの議員がいるのだ。その意味で、4月13日[選挙]がチャンスとなる。私も元教員であり、いろいろ活動をするなかで生徒に支えられた経験をもっている。市会は学生が来たら一発で終わりなんですよ。

(OB) 私は37年卒である。市に対して2つの意見がある。「あり方懇」に対して、廃校では手抜きではないか、これをどう訴えていくかの問題がある。市大は特徴をもたない、市に貢献しない、だから廃校！という論理に立ち向かえる準備をすることだ。もうひとつは、学長を中心に設置者に積極的に働きかけていく、区長への働きかけも必要だろう。とにかく大学はハウステンボスとは違うこと、赤字で終わりでは困ることを訴えることがたいせつだ。

(OB) われわれはいろいろな行動をしなければならない。「あり方懇」は2月末に座長私案に基づいた答申を出すだろう。市民1人あたり12万円の負担となっている。6兆円の市債は市民1人あたり92万円となる。だが、横浜市立大学が借金したのではないことに留意する必要がある。市民は迷惑したという論法、これこそタメにする議論とはいえないか。座長は、「市が大学をもつメリットがない」「存立意義が思い浮かばない」「大学の特徴がない」「だめな大学」という。これぞまさしく学者の仮面を被ったゴロツキの論理ではないか。こんな無茶はどこかで止めなければならない。大学病院を売っちゃった、売られちゃ困る。困るのは結局、患者だろう。本シンポの主催者に提案したい。「あり方懇」に「市大を考える市民の会」として公開質問状を出すべきだ。設置者にも抗議すべきだ。

(女子学生) 市大の存立意義、大学とは何かが論議の中心になっているようだ。大学は真理探求の場だと思う。学生にとって、資格取得や卒歴取得の目的もあるにはあるだろう。これは学生が本当に求めているものではない。[.....聞き取れず]小・中・高生にも配慮すべきであろう。さきほど、「戦略がない」という発言があったが、ここで問題になっているのは戦略や政治ではないと思う。学費値上げ、留学生奨学金打切りが行われたが、私たちがそれに抗議するために立看板を立てようとしたら、大学当局から立看板は政治行動だからいけないといわれた。私たちは「勉学のため」「生活のため」と反論した。多くの人が、大学が正常に機能することを願っている。

(司会) 提案したい。公開質問状を出そう。運営委員会をこの場でつくっていただきたい。具体的に何をするか、3月にもう一度会合をもとう。いや、3月で終わることなく、今後、月に一度ずつシンポを継続していこう。

(団体職員) 私は全国の情報をもっている。文科省は教育学部の半分削減案を出したが、それがどこでも波紋をひろげている。群馬、山形[...]などでは、教育学部の同窓

会と地域の商店街の人々がいっしょになって反対運動を展開している。ところで、「独法化」論議はどこでも盛んだが、最も「儲からない」のが教育学部である。だから、皆さん真剣なのだ。滋賀県では琵琶湖の環境問題にメスを入れたのが滋賀大教育学部で、地域住民は同学部の存続運動を支援している。また、鳥取の地震研究に関して鳥取大教育学部が貢献している、山形大では30人学級の先進県であるが、同大学は横浜市大もガンバレとエールを送っている。

(OB) 63年物理科卒の者だ。合理化闘争の真っ直中の大学で育てられた。本日の会合で取り上げられた税金問題、あの答申[私]案、横浜市の子弟の優先入学など、とんでもない論理だと思う。そこで提案がある。運営委員会設立の提案には大賛成。本日の議論をまとめて「あり方懇」に提出すること、市長に対してもキチンとした文章にして出すこと。私は12月の「もうひとつのあり方懇」を傍聴したが、学生さんはすばらしい議論をしていた。「自分らは税金に應えるだけの勉強をしているだろうか」の反省の弁、「御輿を担ごう」「夏休みに地域住民とスポーツをやろう」の提案、いずれをとっても未来を感じる。私はかつて物理科廃止問題で鍛えられたが、いまの学生は市大存廃問題で鍛えられつつある。 **ところで、本日、学長の姿が見えないのはどうしたことか？**

(学生) ハッパをかけられた思いだ。僕は市大の将来を考えることに共鳴し、この会合に参加した。先輩の方々に倣い、次の世代のためにどういう大学を残すのか、どうしたら幸せになれるのかを考えつづけたい。しかし、議論を聞いていて具体的な話がないように感じた。学生の参加が少ないことも、アジアのなかの横浜市大を考えるべきだ。運営の方法にも欠点があった。足の悪い方がみえたのに、階段教室でのシンポは不つごうであり、そうした配慮が足りなかったと思う。

(司会) 「あり方懇」の委員にイエスカノーかの公開質問状を出したらどうか。

(松井道昭氏) 会を閉じるにあたり、主催者としてまず、皆さんに御礼を申し上げたい。本日の会合に出席していただき感謝に堪えない。本シンポは急ぎょ立ち上げたもので不十分なところが目についた。何よりも本学の教員、とくに学長をはじめとする大学執行部の参加を得られなかった点が残念である。学長には開催を、そして参席を申し入れたが、「都合がある」ということで断られ、開催予定日を改めもう一度申し入れたが、今度は返事をもらえなかった。市大が過去二度ほど存立危機に晒されたときを思うと、隔世の観があるといわざるをえない。学内では疑心暗鬼がはびこり、皆、元気がない。リストラ渦中の企業の雰囲気とはこういうものかを実感している(笑い)。しかし、それに甘んじているわけにもいかない。市民、卒業生こそ、私たちの力の源である。会場より、いろいろな提案があった。今後、それについて慎重に検討したいが、当面できることのみはこの場で約束して、それで本日の会合を閉じることにしたい。

(1) ひとつは受付名簿の件である。これは意見用紙の裏を使って書いていただきたい。e-mailのアドレスをもつ方は、それも付記されんことをお願いしたい。(2) 運営委員会を立ち上げたいので、運営委員になってくださる方はこの場に残ってほしい。(3) 本日の議論は早急にまとめ、関係当局に届けたいし、なによりも皆さんにお渡ししたい。意見用紙のまとめも同様の扱いとしたい。(4) 公開質問状についても運営委員会で検討し、

しかるべき処置をとるつもりである。(5)会のインターネットのホームページは当面、本学教授矢吹晋氏のそれを借用することにしたい。(6)最後にお願ひがある。3月に予定する次のシンポにはもっと多くの方々の参加を希望したい。皆さんの手でヨコのつながりを広げてほしい。

[3]緊急シンポジウム基調報告(03年2月8日)「今の市大の状況について」

(報告者) 商学部昭和42年卒 商学部教授松井道昭

1. 現在、市大で起きていること

大学改革論争たけなわである。わが市大に関していえば、本年秋以来、大学再編をにらみ、学内各機関での、あるいは学外の諮問会議での改革論議に拍車がかかっている。様々な案が錯綜し、報道機関によるセンセーショナルな報道 - 「廃校も選択肢！」(『神奈川新聞』1月17日) - もあって混乱をきわめている。教員・職員・学生は皆、将来、どうなるのか? の不安心理に苛まれているというのが現状である。不安の点では、ここに集まられた多くの卒業生の方々も同じだろうと思う。

何事にも予兆があるように、これにも前ぶれがあった。最近2年間に本学で生起した事件を列挙しておこう。留学生学費減免打切り、教員出勤簿押捺、非常勤講師削減、非常勤講師謝金カット、入試過誤問題処理の不手際、学会出張の研修扱い、後任人事の凍結、事務機構の改編と事務棟改築工事、事務局による評議会ボイコット、学外資金取得の妨害、学年暦編成への干渉、学費値上げ決定…。一連の出来事に共通する特徴は、事務局が抜き打ち的に通告し、即、実行のかたちをとるところにある。つまり、論議のゆとりもなく突然、トップダウン式に事が進められたのだ。したがって、関係者が事前に十分な情報を得ることもなかった。

そして、大学の独立法人化を睨む改革論議が本格化する。学生はまったくお呼びではなく、職員・職員に対してもほとんどまったくといっていいほど情報提供がなされず、結果だけが知らされ、承認を迫られるのだ。教員はどうか? といえは、評議会、教授会などでいちおう大ざっぱな情報提供を受け、改革論議がテーブルに乗るものの、それがどのようなグランドデザインに基づくもので、自分らはいかなる責任権限のもとに何をなすのか、なしうるのかははっきりしないまま、“賽の河原”の小鬼の石積み作業よろしく、「作っては壊し」を繰り返してきた。

通常では、何か特別の改革を行うとき、学長のもとにおかれる諮問機関が改革案をまとめ、評議会 教授会 学科に諮るという手順を経るのにたいし、今回は学長指名の少数教員と事務職員の混成チームから成る「戦略会議」(臨時機関)と、教授会から選出され評議会に責任をもつ「将来構想委員会」(常設機関)とが併置された。両者の関係を学則上ははっきりさせないまま、改革案作成作業において事実的に戦略会議が将来構想委員会を先導するかたちをとった。さらに、時間が切迫していることを口実に、両機関ともに実質的に少数の幹事会によって運営されたため、両機関の一般メンバ - 自身、論議の中身を十分知らないままに、いきなり決着論議に向かってしまうことになった。ましてや、ヒラ教員は何も知らないうちに、言うならば、総論抜きでいきな

り各論論議をやらされたのだ。

9月からは「市立大学の今後のあり方懇談会」(以下、「あり方懇」と略す)が加わって、混乱はさらに大きくなっていく。これは後で述べる。要するに、改革論議はおしなべて事務局主導(「あり方懇」と「戦略会議」の両方をコントロール)によるトップダウン式に進んだ。そして「戦略会議」が「将来構想委員会」を誘導する。そして、それを後押したのが、事務局によるブリーフィングに基づくと思われる不正確な新聞報道である。結局、「あり方懇」「戦略会議」「将来構想委員会」の中心につねに事務局が位置する。こういうことは今までも皆無というわけではないが、このように電撃的に、それでいて体系的に行われたのは初めてである。私たちにとって黙過しえないことは、以下の4点に要約できる。

(1)教育・研究の現場をあずかる者、事務・医療に直接かかわる者が不在のまま改革論議が進んでいること。

(2)とくに、この直接関係者を被告席に座らせ、市大事務局が堂々と原告席の一角に陣取って改革論議を誘導していることである。百歩譲って、大学行政に何らか手落ちあったと仮定したとき、事務局には責任がないのであろうか。

(3)さらに、「あり方懇」橋爪大三郎座長の発言を借りるかたちで、いままで嘗々として築かれてきた伝統ある横浜市大の過去の業績がおしなべて否定され、間接的に卒業生が冒瀆されていること。

(4)先に結論ありき！の論議であることは自明。「論点先取」が見え見えになっていること。市大の事業を真に問うというのではなく、はじめから市大の存立意義を否定ないし限定するために、論議の過程において第三者評価、財務分析など、あらゆる工夫が凝らされていること。

市政に責任をもつのは市民自身である。教員も職員も学生も皆市民であり、卒業生もいうならば市民の出身者(卒業生)である。教育現場をあずかる者の意見を聴かずして、どんな改革論議をしても、実行は不成功に終わるのであろう。学校というのは一般の会社と異なり、いつまでも母校を慕う多数の卒業生があり、「金食い虫だから、豊んでしまえ！」でケリがつくものではない。また、人材養成を事とする教育行政や文化行政は微妙な分野である。教育体系は百年を単位にして取り組まなければならないといわれる。実行の成否は一朝一夕にはわからないものである。

2. なぜこのような異常事態が起きたのか？

これを考えるには、以下の2つの要因を抜きにしては語れない。

横浜市財政の累積赤字への対応、国公立大学の独立行政法人化(以下、「独法化」と略す)に伴う再編、である。

まず、第一の要因から入ろう。ひとこと言えば、新市長の誕生後に横浜市の事業に対する一斉見直し業務の一環として、市立大学もその射程内に取り込まれることになり、「市立大学の今後のあり方懇談会(あり方懇)」なる市長の諮問機関が発足した。市長はあいさつのなかで、「横浜市が大学を設置する意義があるのか、大学の経営はどういう形態が適切なのか、今後、どういう形で大学改革の方向を目指し

ていくべきかについて、検討する必要がある」と述べた。つまり、“市大の存廃を含め改革案を策定するように”と諮問したところから、一気に火がついた。

市長は次のように述べる。(第1回「あり方懇」平成15年9月3日)

「こうした(少子化とともに、18才人口が大幅に進展する)中、国立大学では独立行政法人化に向けた準備が進められており、また私立大学では壮絶な生き残りをかけた対策を模索しているところでもあります。一方で、横浜市の財政状況については、歳入の中心を占める横浜市財政収入が景気低迷の影響を受け減少傾向にあり、非常に厳しい状況にあります。」

市長は民間の役割とは異なったかたちでの行政の役割を強調し、それを前提にしての市立大学の存在意義を質したわけである。行く手に大学民営化が待ち受けていることを予想させる。本日、ここで論議していただきたいことは、市大の財務状況に関する「あり方懇」の財務分析の当否である。

思うに、今年75周年を迎える横浜市立大学の歴史において廃校の危機を迎えたのは3度ある。歴史を紐解くわけは、そこに、現下の市大が直面する廃校危機をどのように凌いだらよいかを示唆するところ大であるからだ。

3度の廃校危機のことごとくが横浜市の財政事情と関連している。最初は、昭和18～19年の戦時中、「軍医をつくれ」という軍部の至上命令により横浜医学専門学校を発足させる関係上、財政事情からY専(市大の前身、横浜商業専門学校)があわや廃校の瀬戸際まで追い込まれた。2度目は昭和32～34年、市は財政事情の悪化を理由に、交通局の合理化を皮切りに、市大の合理化(医学部の国立大移管、文理学部の縮小)を迫ってきた。このときも市大は懸命な努力の末、文理学部の学科縮小、教員削減をもって、大学本体は辛くも廃校を免れた。そして、現下の危機が3度目に当たる。

いずれのばあいも医学部・病院の設置、増設が市財政を圧迫し、これが大学そのものの存立を危うくする点で共通性がある。もうひとつの共通性は、大学側が「実学教育中心」を標榜することで窮地を切り抜けた点である。前2回の廃校危機時と、今回のばあいが著しく違うのは、校長および学長を中心軸として大学首脳部が一丸となって防戦につとめたこと、教員がそれによく応え、学生を巻き込んで、抗議集会、座り込み、市役所への陳情を盛んに行った点である。前2回の危機に直面したときの校長(学長)は奇しくも同じ人物＝前田幸太郎氏であった。彼は文部省、市役所に陳情のために日参。あまりの心労がたたったのか、前田学長は騒動が一段落してすぐに他界してしまう。

市大の危機の下地を構成するもうひとつの要素は、全国規模での「独法化」の動きである。これについては、先程の市長の「あり方懇」でのあいさつの中でも出てくる。市大もこの騒動に巻き込まれたのだ。「独法化」への対応はわが市大でも今回の騒動以前から、論議されてきたし、それなりの方向を定めつつあった。それが新市長の誕生とともに、廃校問題と重なってきたのである。「独法化」は、言葉だけが先行しているキライもあるので、ここで簡単に説明しておこう。

独法化とは、国および地方公共団体の特定事業所を独立法人として国(地方公共団体)の直接経営から切り離し、会計・採算など自己責任において処理させようとするものである。独立行政法人通則法(1999年成立)によれば、独立法人は主務大臣の定める中期目標に応じて中期計画を作成し、業務を遂行する。また、会計原則として複式簿記などの企業会計的手法を導入し、原則として企業監査人の監査を受ける。法人の長は高度の知識・経験を有する者の中から公募を含めて任命する。

完全に独立か?という、そうでもない。これまでも長く国営ないし公営にされてきた経緯が示すように、図書館、学校など本来的に営利に馴染まない部署では一定の資金援助がなされ、そのぶんだけ、主務官庁による統制はつづくことになる。職員の身分も公務員のままのものもあれば、非公務員となるものもあるという具合である。横浜市大のように医学部をもち病院をもつところでは、大学を独法化するにあたり、医学部と病院が切り離される可能性もある。

国の「独法化」に示されるように、特徴は国の機関でも、応援団をもたない弱いところが真っ先に生け贄として差し出されているところに特徴がある。国立公文書館、大学入試センター、大蔵省印刷局などがその例。

さて、「独法化」は新しいものかという、そうでもない。年配の方々は記憶しておられると思われるが、これは本質的に昭和46年の中教審答申(国大協をはじめ世論の集中砲火を浴びて頓挫)と瓜二つである。同答申は 大学の種別化、教育・研究組織の分離、集中管理制、授業科目区分の廃止、自己点検・評価を核とする大学改革をうたった。これは結局、世論の猛反対に遭って国立大学への適用は見合わせになったが、を除く残り4指標は筑波大学において20数年前に先行的に実施された。

今回の改革案は、上記4つの要素に「独法化」を加えたものである。大学の種別化と教育・研究組織の分離はすでに、現在の大学院重点化で結実している。これの結果するところはきわめて重大である。周知のように、今後の大学は東大・京大など研究重点の大学(一流校)とそうでない大学(二流校)とに区分され、後者は徐々に(18才人口減少を理由に)切り捨ての運命を迎えることが予想される。

「独法化」の中身については「国立大学法人法案」に詳しくふれられている。これはインターネットで見ることができる。公立大学の「独法化」に関する法案はまだ公表されていないが、中身はほぼこれと似通ったもの、あるいはそれ以上に設置者の意思を強く反映したものになるものと思われる。そこで、ここでは国立大学を法案を引き合いにだして論じることにはしたい。

その第一は大学自治の骨抜きである。今までは大学自治が建て前となっており、教員人事権と教学権が教授会がおかれていたが、今後は経営と教学が分離され、大学経営に責任をもつ「経営協議会」と、教学権をもつ「教育研究評議会」とになる。前者には学外者が多数入り、後者より優位にたつ。従来の教授会の人事権は「教育研究評議会」の管轄下におかれる。これは、学長と彼の指名する者、学部長・研究科長など少数者で構成される。教員人事に任期制が導入され、解雇・リストラがしやすく

なる。

第二に、独法化は競争原理の導入により、効率化一辺倒に傾斜し、競争力強化に役立たない学部・学科・専攻の切り捨てるにつながる公算大である。それどころか、廃校も自由自在となる。設置者はこれまでの国ではなく、法人になる。国は大学に対して財政責任を負わず、私立大学並みの財政支援でよいことになる。中期計画が達成できなければ予算を削れるし、縮小・改編はもとより、いよいよ駄目となると廃校を命じることもできる。無駄を省き、効率性をますという良い影響が出る反面、息のながい研究や基礎研究が疎かにされる可能性がある。教育面ではプラグマティズムが横行し、役に立つこと、即戦力の人材養成が中心となる。

第三に、独立採算となることから、学費値上げ必至である。先に文科省が発表した試算では18万6千円アップになる公算。これは国民から教育の機会均等を打ち破ることにつながる。わが市大は今年受験生は増大した。いろいろな要因があると思われるが、もっとも大きなものはその学費の安さにあるようだ。安いからこそ、国公立大学で学ぶことのできた人たちに、門戸を閉じることになる。今後、学費は学部別になるということだが、学費の最も高い医学部に入るのは金持ち子弟のみとなるだろう。これは人材養成の面でも、医学の発展の面でも、医療行政の面でも問題が残る。

3. 市立大学の「地域貢献」について

「あり方懇」で頻繁に、というより中心的に取り扱われているテーマに市立大学の「地域貢献」がある。「地域貢献」を市大に即して考えるとき、横浜市民および横浜市ということになるが、この「地域貢献」をどう考えるか、市大がそれを指標にして貢献しているか否かで、横浜市立大学の存立意義に直結する。これは重要なので、本日のシンポジウムでぜひ取りあげていただきたい。

論点は4つある。

(1) 大学に「地域貢献」を求める際の留意点

イ。「国立大学は国民に貢献し、公立大学は地域住民に貢献し、私学は自分に貢献する」？ ロ.文化・学術事業の評価は時間をおかねばわからないことが多い。これをどう考慮するか？ ハ.学術研究は人類一般に貢献する面がある。これを「地域貢献」査定で、どう考慮するか？

(2) 「地域貢献」とはどのようなことを指すのか。

a. 市民(子弟)が市大で学べるか？ b. 市民が施設を利用できるか？
c. 卒業生が横浜市内に就職するか？ d. 研究成果が横浜市民に役立つか？ e. 研究成果が市政に役立つか？ f. 市外出身者が市に集まるか？ g. 市大の存在自体が醸し出す知的・文化的雰囲気？

註、もし「地域貢献」をa～eに限定するとすれば、市民は他公立大学が付与する成果を享受するのは自粛しなければならなくなる。「地域貢献」はつねづね査定するものではなくて、関係者の努力目標と考えてはいけないのだろうか？

(3) 「地域貢献」をどのようにして計るか？

(4)「地域貢献」をだれが測定するのか？ 設置者、地域住民、大学構成員、その他

緊急シンポジウム

「市大の将来を考える」

- ※ 先頃の「市大の在り方懇談会」において、座長の橋爪氏から「市大の廃校ないし縮小」を提案する私案が提出されました。これは、市大が多くの有為な人材を輩出して来てきたことなどにはまったく目をくれず、お金勘定のみで結論を出しているものです。私たち市大に誇りと愛情を持つ者にとって、まったく受け入れることが出来ません
- ※ 下記の要領で市大の将来を考えるシンポジウムを開きます。卒業生・在校生・市民の皆様のご参加をお待ちします。
- ※ 期日：2月8日(土) 午後3時～6時
- ※ 場所：横浜市大 瀬戸キャンパス 大会議室
- ※ 内容：報告「今の市大の状況について」商学部教授 松井道昭
- ※ シンポジウム：「市大の将来に期待する」
- ※ パネリスト：三宅陸郎 (S.32年卒数学専攻)
- ※ 阿部真夫 (S.37年卒法律専攻)
- ※ 竹田正明 (S.37年卒英文専攻)
- ※ 村瀬弘明 (S40年卒国文専攻)
- ※ 遠藤紀明 (S.56年卒独文専攻)
- ※ 山田勇介 (商学部学生)
- ※ 主催：市大を考える市民の会 連絡先：横浜市立大学商学部 松井道昭(電話)045-787-2131

編集発行人：矢吹晋(暫定)

e-mail: yabuki@ca2.so-net.ne.jp

<http://www2.big.or.jp/~yabuki>
